
。隣人クライシス。

だいだい。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

。隣人クライシス。

【NZコード】

N7771R

【作者名】

だいだい。

【あらすじ】

隣の家に住むのはこのへんじゃ有名な不良且つイケメンの幼馴染み。隣の学校に通うのは幼馴染みの友人且つ金持ち且つまたもイケメン。隣の席に座るのは転校生且つヤンデレ且つなんと美少女。こんな【隣人】たちと繰り広げるそんな感じの物語。もしかしたらもっと【隣人】が増えるかもしれません！5／11・あらすじ、タイトルを変更致しました。

隣の『君』の気になる人。

じゅーっと紙パックから野菜ジュースを吸い上げる。今は昼。場所は屋上。背後にいる男に寄りかかる、人によつて抱きしめられてるよつにも見えるかもしけないが自分は寄りかかってるつもりだ。うん。ちらりと背後の男を見る。一見ぼーっとしてるよつに見えなくもないが付き合いが長い自分なら分かる。見とれているのだ。視線を戻して向かい側にいるとある女子生徒を眺める。目が合つたから笑つたら笑い返してくれた、その直後後ろの男の体が強張つたのがわかつた。ふう、溜息をついた後もう一度野菜ジュースを吸い上げる。ずこーと音がした。おおつと空だつたのか。仕方がないからまたちらりと見上げる。相変わらずぼーっとしている。自分はまた溜息をついた。

どうせならばつきりすればいいと思つ。先程からぼーっとしているもとい見とれる男を見る。昨日もそう、一昨日もそう、明日もそうだ。もうはつきりすればいいんだ。ふうつと溜息をつく。びくりと隣にいた女子が肩を揺らす。ああ、そりゃねば教室で雑談中だつたのを忘れてた。

「「、「ごめん。何か嫌なこと話してたかな・・・?」
「気にする」とないわよ、びくせ違つこと考えてたんでしょ?」

その通りだ。黙つて頷くと、ほつとしたような顔をする。可愛い子だ。いつもじやないけど基本おどおどしてる子は高橋綾すごい可

愛い。うん。もう一人は柳三樹。ちばは可愛こというより美しい。気の強い子だし、多分自分のこと嫌つてる。仲良くしてくれてるけど。

「ハジハジしてゐ男つて見てて苛つくなね。」

「はあ？」

「あ、えつと……そう、かなあ？」

「うん、自分は嫌い。それじゃ。」

席を立つと教室の前でたむろつていた男。幼馴染みである、楠木啓介を掴むと引きつり歩いた。近くにあつた無人の教室に入る。手を離すとゆつくつと姿勢を正した。

「あー……何で怒つてんの？」

「ハジハジしてないでさつあと面白したり。そして心が砕ければいいのに。」

「んー？……ああ、やっぱお前にはバレてると思った。」

「穴があきやうなくらい見てたもんねえ？けいけいやん。」

あー……と何か言おつとして口を開じる。そして苦笑を浮かべた。ハジハジしてゐる男は嫌いだ。こいつみたいに無駄に顔が整つてゐる男なら特にだ。幼馴染みのけいけいやんは身内びいきをして頭が悪い以外は基本、完璧だ。慣れるまではあまり表情も変えないし、おしゃべりなわけでもないが何故か人が群がるわ群がるわ。せりにこの辺じや有名な不良と言つてゐるから、取り巻きだとか僕弟（…）みたいなやつらもハジハジしてゐる。そしてこの男のカノジョという人物は決まって同じ条件がある。

「今回もいつもと同じ理由？」

「んー、うう。……あいつ、ホント可愛い。守つてやりてえ。」

庇護欲をそぐへりに可愛い子、である。昔から見た田と反して可愛いものとか甘いものが好きだった。そして気付いたら可愛い子まで好きになっていた、という感じだ。付き合えば蔑ろとかにするわけではなく、むしろ結構近くすまうだと思つ。まあ、いい男なんだろう。ただ欠点は可愛い子が好き、そういうれば普通だらうと思うかもしだれないが、こいつの場合可愛いて胸が小さくて、背も小さくて、と小さくて可愛い子が好きなのだ。胸が小さいはなかなか大事なポイントらしい。今回好きな子は、鈴木すずき 遥香はるかちゃん。さつき挙げた条件全てが当てはまる、所謂けいちゃんのストライクゾーンの子なのだ。

「告白するの？」
「んー、お前はどう思つ？」
「好きならすれば。断られないよ、多分。」
「おー、んじゃ、する。」
「・・・ふうん？」

次の日、けいちゃんと遥香ちゃんは見事恋人同士になっていた。

隣の『君』の気になる人。（後書き）

まあ、こんな感じ（ 、 、 ）

勘違い。

そういうば、すじく遅い氣もするけど自分の名前は斎藤 さいとう 小鳥こどりとい
う。個人的にはあまり好きな名前じゃない、だつて小鳥つて何?ぞ
わざわざする・・・あー! やつぱりぞわざわざするつ。

「で、どう思うの?」

「・・・つと?」

え、何。いきなり何。相手、三樹は盛大に溜息をつくと思いつくり
睨み付けた。どうせなら質問の内容を教えて欲しい。おどおどと見
ていた綾が助け船を出してくれた。可愛い子。

「えと・・・ほら、楠木くんがまた恋人できたでしょ?今まで氣にな
なつてたけど小鳥ちゃんはどう思つてるのかなあ・・・つて。」

「そうよ、あんなできすぎた幼馴染みがいたらそれしか目に入らな
くなるんじゃない?」

なるほど、そういうことか。この手の質問にはもう随分と慣れた。
主に中学生のときだが、けいちゃんを好きだという女子たちに何度も詰め寄られだし、友人には今のような質問でからかわれた。正直
こういう質問が好きじゃない、むしろ嫌気がさす。だが自分は偉い
からそういうことは一切表に出さない。

「平氣だよ、確かに昔から一緒にいるけど。何故かは知らないけど寧ろ許容範囲が広くなつたから。感謝してる。」

「本当に何ですよ。」

「何でだろうねえ。」

何でと聞かれてもこちらが困る。狭まるビリカ広くなつたの本當なのだ。所謂教室の日陰に居る奴らだつて好きになれる。自分、やつぱり偉いかもしねない。

あ、と三樹が声を上げる。ぐい、と手を引っ張られるとそのまま歩き出される。人気のない場所に連れてこられた。何ですか、告白ですか。見上げると知らない男子生徒がいた。誰だ、この人。ああ、でも結構顔整つてる。不機嫌そうな顔立ちからして告白ではないことは明らかだ。お互い黙つたままだが、不意に相手が口を開けだした。

「お前さあ、なんで何もしないわけ？」

「うん？言いたいことがいまいち分からないんだけど。」

「・・・だからさあ、お前。楠木啓介が好きなんだろ？なんで何もしないんだよ。」

「君、勘違いしてるよ。自分はけいちゃんのこと恋愛対象として見てない。」

ぎゅっと眉間に皺がよつた。たまにいるんだよねえ、こりこり奴が。多分、遥香ちゃんが好きなんだろ。でも、遥香ちゃんがけいちゃんと付き合つてしまつたから自分にけいちゃんを取り戻す・。

・?何かおかしいような?まあ、取り返して欲しいんだろ?。溜息をつくとそこから立ち去るうと踵を返す。そしてまた、手を掴まれた。

「でも、 “お気に入り” であることは変わらないんだ?」

「・・・は?」

「いつも女子たちが嫉妬するくらいベタベタしてんだ、楠木に彼女がいなときはお前が相手してんだろう。」

「は、相手?・・・何それ。」

「どほけんなよ、あいつとやつてんだろうーお前だつて、あいつの好みと同じ容姿してるものなんあ!?いいからせつねど

不意に言葉が途絶えた。影が差す。その影の主に男子生徒は胸ぐらを思いつきり掴まれていた。わー、修羅場?影の主、我らがけいちやんは元から悪い目つきをむらで悪くしていた。チラツと見えただけだからよく見えなかつたけど、でも多分それが一番いい。見たらきっと自分も体が竦むと思うし。

「お前、何してんの?」

「・・・つ。べ、別に何もつ

「あー?嘘ついてじやねえぞ、おい。」

ぶんぶんとひたすら首を振る。何だ、思つたより根性ないな。人の殴るところがみたいわけじゃないから今度こそ踵を返す。歩き出した自分の背後からうわ、と氣の抜けた声がする。しばらく歩いてたがちょっと立ち止まってみる。後にさつきからずつとつってきた

けこちやんも立ち止まつたようだ。結局殴らなかつたようだ、うん。いいことだ。

「・・・何言われた？内容によつては絞める。」

「うん、いや、初めて言われたことだからちょっとびっくりしんだけなんだけど。彼からは自分たちが所謂セフレに見えたらしい。」

「セフレ？何で。」

「女子たちが嫉妬するくらいベタベタしてて、自分の容姿が君のストライクゾーンだかららしいよ？」

意味分かんないね、と言つが返事がかえつてこなかつた。不思議に思つたから振り向くとばつちりけいちゃんと田が合つ。ふいと視線はちょっと経つたら外されたが、何だ。一体なんだ。

「自分、そろそろ戻るね。それじゃ。」

「・・・ん。」

遅刻するのは気にしないけど、綾に心配かけてるかもしれない。自分はちょっと歩く速度をあげた。

そのおかげか、歩き去る自分をじつと見ているけいちゃんには気付ずかなかつたが。それを目撃した人には結構異様だつたらしい。まあ、そういうう。

教室に戻つて、案の定心配した綾とさりげなく何もなかつたかと聞

「これるシンタレ三樹ちやんと話してこらひて今朝のひとなん
てさせとがれることじが出来たのでした。

嫉妬なんてよくあることだ。けいちゃんと一緒にいれば毎回そうだ。だが、けいちゃんと現在進行形で付き合ってる人からされることはない。前にも言つたと思うが、けいちゃんは付き合えば案外近くすほつだ。その子が望めば他の女子たちとの接触は極力避ける。顔が良くて、今まで基本は人に平等に接していた男が自分だけを優先して自分だけを見てくれるところは優越感がすごいんじゃないだろうか？まあ、自分はあんまりそういうの好きじゃないけど。

こういう訳で、けいちゃんの恋人は自分に嫉妬することはない。むしろ見下してくれる。それでは、遥香ちゃんは一体全体何で自分に嫉妬をしてくるのでしょうか。曰く、啓介くんにこれ以上近寄らないで、らしい。・・・ええ？

友人だと思われる女子を2人連れて、涙目でこちらをきつと睨んでいる。・・・ええ、本当に何で？

「・・・いつも通り接してるつもりなんだけど。」

「はあ？何いつてんの？啓介くんの気を引こうとしてるの見え見えなんだよっ！」

「たかが幼馴染みが調子乗んなよ？」

・・・。

いい加減こういうのも飽きたなあ。最初は漫画みたいでこれすごい！つてちよつとテンション上がったんだけどなあ・・・。というか皆同じようなことしか言わないんだよね。あ、でもたかが幼馴染みは初めて言われた。たかが幼馴染み、されど幼馴染みみたいな。こ

いつりよつ前からひつと一緒にいるんだから遠慮がなくなるのせう
たり前だわ。

“たかが”幼馴染みだから、遠慮なく男と意識しないで接し
てるんだけど。」

「嘘つくなよ。どうせ家近くからとか言ひて、家に押しかけてるん
でしょ？」

「やうやつひかるー、楠木に迷惑かけんのやめたから?」

「ヤーヤーー。毎の時とかを遙香がこるつてのニベタベタしてれあ・・・

・・・

「楠木、絶対遙香のどこに行きたかったと黙つとだよね。」

「ねえ、ちよつと聞いてんの?」

なんだこのステレオ攻撃。すげこ苛つぐ。

押しかけてる?むしろ押ししかけられてますが。迷惑かけてる?むし
ろこうやって迷惑かけられてますが。遙香ちゃんのどこ行きたかつ
た?むしろ法んで離れようとしてましたが。ええ、ええ聞いてます
よ。聞いてますとも、ええ!

「コウカちゃん、ジュリちゃん、ここ過ぎだよ。」

遙香ちゃんの間延びした声もあんまり好きじゃないな。自分は。い
や、自分だけだと思つたけどね?（強調）けいちゃんは結構好きだと
思つけどね?けいちゃんは。（強調）
とつあえず、コウカちゃんジュリちゃんペアは黙々ひとをしたりじー。

「あのねえ？私はねえ、啓介くんとじゅうと一緒にいたいのにねえ、齊藤さんがいるせいでえ啓介くんとあんまり居られないの。だから、齊藤さんこれ以上啓介くんに近寄らないで欲しいなあ・・・と思つてえ？」

「・・・ならそんな風にあいつにも言つてもらえない？」

「はあ！？あんた何、自意識過剰なこと言つてんの？あんたがいつも近寄つてんじゃない！」

もっとけいちゃん見てよつよ。自分だつていちよつ氣を遣つてるんだよ？もしかしたらこうなるかもしけないと思つてさ。とりあえず、笑つておいつと思つ。友人曰く、苛つこてるときの自分の笑顔はそれなりに怖いらし。それなりに。願い通り、コウちゃんかジココちゃんのじつぢかは肩を揺らせて押し黙つた。

「自意識過剰つて、何？むしろ遙香ちゃんと付き合へば、つて背中押してやつたの自分なんだよね。なのにじうして自分が嫉妬しないといけないわけ？意味が分からなーいな。」

3人は驚いたように自分を見る。はは、目がまん丸だー。異様な沈黙が自分たちの間に流れ始めた丁度そのとき。

「小鳥、いるかーって・・・あー、何してんの？」

「この話の原因が携帯を手に持ちながら教室の中を覗いていた。まあ、けいけちゃんには異様に見えるだろ？　自分は溜息をつくと遙香ちゃん、・・・コウちゃん（でいこや）の間を通り抜けるとけいけちゃんが持っていた携帯を（乱暴に）取る。携帯を操作して携帯から自分の連絡先を消した。けいけちゃんがそれを怪訝そうにみる。

「お前、何してんの？」

「・・・・何かさあ、遙香ちゃんがけいけちゃんが自分と関わっているのが嫌らしいんだよね。」

「あー・・・・へえ。それで？」

「おこ、ここ今にやけたわ。ナツ、恋は眞田ですかー。（やせぐれ

「でも、家とか隣同士だし顔合わせあいやうでしょ？だから携帯から自分を削除。」

「あー、なるほど。いや、でもさ」

「詳しこことは、そこの人間に聞いてね。それじゃ。」

けいけちゃんが何か言いたげだけどこいや。わあ、帰るついで少しの我が家へ！

ふと、時計を見上げる。あ、もうこんな時間か。買い物行かないとなー。外出かける準備をする。もうそろそろ冬だ。出来るだけ暖かくしよう。

外に出たとき、隣のけいちゃんの家の前（というか玄関の前）に誰か人がいたようだがけいちゃんの家はあいにく留守だ。伝える義理もないし、留守だと分かれれば帰るだろう。それにしても見覚えのある服だつたなあ・・・。

あ、今日鍋にしよう。

鍋の具材を買つたし、新しいお菓子も買つたし、寒いことを除けばちょっと良い日かもしれない。・・・良い日だよ、ね？うん。いいよ、明日は休みだし。今日のこと精一杯友人たちに言いふらそう。自分はそう心に誓いをたてた。

家の前にちよつとびっくりした。だって、多分自分が買い物に行く前いた人がまだけいちゃんの家の前にいたからである。・・・ええ？ しうがないから話かけることにした。

「留守の家の前で何してんの？」

立っていた男に話しかける。ゆつくりと男は振り返る。そして何故か見つめ合つ。類は友を呼ぶ？この男、随分と整つた顔をしてやがる。男は相変わらずこちらをじつと見ていた。何か、面倒になりそうだな・・・。

友達の友達は
(前書き)

みんな友達。

友達の友達は

「・・・自分の顔そんなに変ですか。」

「・・・いや、むしろ愛らしいと思」

「その家留守だから、さつさと潔く帰った方がいいと思つ。」

ふう。幻聴が聞こえやがったぜ。自分もさつさと帰ろうとして手を掴まれた。思いの外冷たくて余計に驚いた。・・・自分にどうしろと? 獄まれた手と、男を交互に見ると溜息をつく。手を(乱暴)に振り払うと、家に入る。玄関に荷物を置くとある紙を取つてまた外にでる。振り向いた男を無視してけいちゃんの家のドアノブに掛けた。所謂、ドアノブカードというヤツだ。どちらかの荷物、もしくは友人をこちらの家で預かっているという意味を表す。ちなみに自分の自作だ。友人に関しては共通に限るのだが、いつ人が帰つてくるか分からない家の前に人をずっと放置しておけない。しかもこんな寒空の下に。自分つて偉い。

男の前に戻ると、家においてと声を掛けた。男は黙つてついてきた。

「それで君つて、けい・・・すけの何?」

「・・・多分、友人だ。」

「何で留守の家の前でずっと待つてたわけ?」

「今日、楠木の家に泊まる予定だつた。留守なのは分かつたから帰ろうと思つたが、家の鍵をどこかに忘れてきた。」

「……それは、大変だね。」

見かけに会わはずドジつ子なのか。やめてくれ、萌えないぞ。全然。まあ、ゆっくりしていいてくれと伝え、台所に向かう。といつても鍋だからいつもより手を抜ける。今の時間留守ならけいちゃんの夕食は多分自分の家で食べるだろうと思い、一人分買っておいた。これはもはや癖だ。でも今考えてみると多分あいつは愛しの遙香ちゃんと夕食を食べるもしくは作つてもらうだろう。必要ななかつたといつことになるが、けいちゃんの友人のお陰で買つてきた物が余ることもないだろう。・・・食べてくれる、よね。

よし、準備完了だ。

ソファに座つていた男に近づく。

「今日は鍋です。」

「？・・・ああ、そうなのか。」

男はどうやら一緒に食べるとこつ選択肢がないらしい。動じないとなかった。言葉が足りなかつたと反省する。（棒読み）

「何も食べてないんだろう? よければ一緒に。一度一人分くらいあるんだ。」

男は少し田を見開いた後、立ち上がった。

男の名前は、佐藤 さとう 怜 れい というらしい。見覚えがあると思った服は制服で、自分の隣にある有名な進学校のものだった。けいちゃんが関わらないと思ってた学校だ。だって眞面目で頭がいい人ばかりの学校だから。お泊まり会をする程度にはけいちゃんと仲がいいらしい。今は家に親が居なく、手持ち金もあまりないとのこと。自分が幼馴染みだと言つとやうだと思ったと言つた。どうやら少し話を聞いてたらしい。一体何を話したのか気になるが。

「話に聞いた以上に、魅力的だ」

「あ、そういうえば今日けいちゃんが帰つてこなかつたりどうするの？」

？

気になつたことを聞いてみた。何か言つていたような気がするけどまた幻聴だろう。怜（名前で呼んで欲しいと言わた）は少し考えたあと、自分とまた田を合わせる。・・・こいつと田を合わせたくないと思う。だって、何というかじつとつとこいつかねつとつというかすごいんだよつ。

「出来るなら、泊まらせてもらいたい。
「・・・つと、そつなると思つたよ。
「すまないな。」

謝るが、どことなく嬉しそうに見えなくもないのは気のせいだとい
いな。殴りたくなるから。

「新しい彼女が出来たからきっと、浮かれてるんだろうなー・・・。

「そりだな、皿邊話はうんざつするほど聞かされた。写真も見せられ
た。」

「へえ？ 君はどんなタイプが好きなの？」

「・・・あまり決まっていないな。強いて言つなら」

「やっぱりいいや。」

目が何か危ないよ、何でそんなに熱っぽい皿で見るんだ！ やめてく
れ！ 早くけいちゃん、帰つてこないかと願っていたときに一度よべ
玄関が開く音がした。その後足音がしてリビングに入るためのドア
が開く。思った通りけいちゃんが立っていた。

「おー、鍋？」

「うん。あ、でももうないよ。」

「・・・何で。」

「えー？ 君、愛おしいカノジョ様に手料理振る舞つてもひつたんじ
やないの？」

「あー・・・、上手くなかった。」

ちょっと顔をしかめて言つ。我慢できないうらい美味しくなかつた
らじこ。さまあみやがれと笑つてやつた。（心の中で）けいちゃん

は怜のほうへ向いた。

「悪かつたな、家留守にして。」

「覚えの悪いお前のことだ、予想はしていた。していただけだったが。」

「あー・・・、ホントわり。」

君が鍵を落とさなければ良かつたんだと言いたいのをぐつと押さえ
る。席を立つと台所に向かう、簡単なものくらいなら作れるだろう。
あ、パンがある。仕方ないからサンドイッチを作つてやる。立つて
いたけいちゃんに手を洗うように言ひ。おー、と氣のない返事をし
てたつた。

ぼけーっとサンドイッチを食べる男とそれを眺める男を見る。[写真]
取つたら売れそうだな。というかモデルとかやんないのかな、売れ
ると思うんだけどなー・・・。視線に気付いた怜がこちらを見つめ
返してきた。じつと見返すと、じつと負けじと見返してきた。

「・・・あー、何してんの?」

「逸らしたら負けの気がして。」

「小鳥は、愛らしいな。」

げほつとけいちゃんが隣で咳き込んだ。自分はひつと声が漏れたま
ま固まる。幻聴?いや今言つた。今まで阻止したのに!ポロリと簡

單に言つた！

「お前ひてさあ・・・、そんな簡単に女口説くヤツだつけ?
まさか。お前じやあるまいし。」

「・・・んじや、何で。」

「わう思つたからに決まつてゐるだらう。お前は今恋人がいるんだ
ろ? 小鳥に何を言つてもしてもいいだらう?」

しても! ?今、してもつて言つた! ?な、何言つてゐのコイツ!
けいちゃんは食べかけのサンデイツチと鞄を持ち、立ちあがつた。
不機嫌そうな顔をしている。コイツも何があつた!

「俺ん家に移動。」

「分かつた。小鳥、世話になつたな。また来る。」

また来るつて言つたよー。コイツー

不機嫌そくなまま歩き出すけいちゃんと、相変わらず無表情の冷を
呆然と見送つた。

友達の友達は（後書き）

隣の家の『君』と隣の学校の『君』 そろいましたねえ。

学校にて。

何か疲れたなあ・・・。溜息をつきたいのをじらうと吐き出す。・・・これって溜息じゃない、よね？

「何溜息ついてんのよ、鬱陶しいわ。」

「・・・」めん、じらえたつもりだつたんだけど。」

「あはは、何か一回飲み込んだよね。・・・えつと溜息を?」

「何で自分の言つたことを疑問に思つのよ。」

「あうう・・・。」

この2人は自分の心のオアシスだ。このやり取りを見ると心が和む。三樹が視線に気付いたらしい。気持ち悪いわね、こっち見ないでくれるホント気持ち悪いわ。みたいな目で冷めた目で見てきた。そつと視線を逸らす。もちろんああいう目で見られて喜ぶマゾではないからである。地味に傷つくのである。

昨日あの後、当然だが謝罪も何の連絡もなかつた。そう、謝罪もなかつた（此処重要）。個人的にはもっと誠心誠意を込めて謝つて欲しかつたのだが、そんなことをするほどけいちゃんは自分に遠慮といふものを持つていない。一体何時捨ててしまつたのだろう。早急に拾ってきて欲しい。何だかちょっと悲しい気持ちで鍋とサンドイッチが載つていた皿を片づけた。

自分は所謂、日常というか平凡というか一般的な普通なのが好きだ。もちろん芸能人に会つてみたいとか、明らかに今の自分じゃ叶えられないことに思いをはせるのも自分にとつては普通である。憧れるという行為は普通だからこそ出来ることだと自分は思うからだ。だが、残念なことに自分は少し一般的な普通とは違う。言わずもがな、けいちゃんのせいだが。けいちゃんの容姿のせいで美形というものにある程度慣れだし、嫉妬だと羨望だと嫌と言つほど受けたし、けいちゃんのツテで明らかに一般人じゃないようなちょっと怖い人たちと関わったこともある。これまたその人たちのツテで芸能人に会えたかもしれない。自分は断つたが。（生の芸能人を見てきたけいちゃんの反応は、案外普通、というものだった。何が普通なのかちょっとだけ悩んだ。）このよくなことが幾度とあつた、当然自分はそれらを受け入れる、そして気付く。これに慣れてしまつたら自分も【普通】じゃなくなってしまう、と。だからけいちゃんとは1歩は無理だつたが半歩くらいの距離感で付き合つてきた。まあ、自分が望んでいた【普通】には近づいた。

けいちゃんの友人という怜。彼は絶対面倒だ。早急にどうにかしなければならない。本当に切実に。

そんなところで新たな問題である。

ちらりと隣を見やる。そこに座るのは今日やつてきた転校生。最初は転校生の話題で持ちきりだつたこの教室も転校生が暗い、というか人を寄せ付けないというかそんな子だつたからいつのまにか転校生からいつもの話題へ移つっていた。もちろん、三樹や綾もである。だが、だがだ。自分は先程からこの子が気になつて仕方ない。何といふかけいちゃんや怜のような一般人とはちょっと違つた雰囲気を持つているというか・・・。こういう勘は大抵当たるモノだ。ちらりとまた転校生を見る。真っ黒い髪は肩につくくらいの長さで、

前下がりの髪型をしている。その目は鬱々とした光をともして、何処かを見ていた。が、ふとその瞳がこちらへ移動してくる。ぱちりと目があつた。・・・・・。ふいと視線を外して綾たちのほうに向き直る。多分転校生からであろう視線は容赦なく背中に突き刺さっていた。

つかられる。

ぱたぱたと足早に廊下を通り、後ろには不安そうな顔をした綾と不機嫌そうな三樹がついてきている。そして少し離れたところに一定の距離を保つてついてくる転校生がいる。……さつきから何なのさ？

「…………まだついてくるよ！」

「何でかな…………」

「ああもう鬱陶しいわ！あんたの後をつけてるんだからあんただがどうにかしなさいよ…………！」

とうとう切れた三樹が小さく叫ぶ。どうにかって言われたって…………どうしようも…………自分はその怒りに答えず、一層早く足を動かした。角をまがうとしたとき、どんと誰かに体当たりをしてしまった。思わず、足を止める。綾たちも同じように止まった。

「…………いたえ。」

「あ、」「めぐ。ちょっと急いでて。…………平気？」

ぶつかった相手はけいちゃんであつた。かなり不機嫌そうな顔である。ぶつかったくらいでこんなに怒る人じゃないから、多分遥香ちゃん何かあつたんだろうか。いや、ただの幼馴染みの勘だけ。ちなみに背中に突き刺さる転校生からの視線はそのままである。ぼ

んと方を叩かれる。見れば三樹がにんまりとした顔で口を開いた。

「ちゅうどいし、頼りになる幼馴染みに何とかしてもらひなさいよ。それじゃ。」

と、けいちゃんの不機嫌顔に怯えてる綾を引っ張つて、来た道を戻つていってしまった。・・・。ええ何それ！？・・・。ええ！？は、薄情者っ！思わず振り向いたらばつちり転校生と目があつてしまつた。何の感情もない瞳がこちらを見つめている。ゆっくりと元の方を見ればけいちゃんはその転校生を不審そうな目で見ていた。いま動すべき・・・だよね。ぎこちなく歩き出した。けいちゃん（と転校生）が当然のようについてきた。どうしよう、何処に行けばいいのこれ・・・（げつそり）

行き先は自然と屋上になつたというかそこしかなかつた（またもげつそり）。重たい足取りでひたすら階段を上る。さきほどからけいちゃんは不審な目から苛立つた目に変わっていた。そしてちらちら見るのをやめてガン見しながら階段を上つていて。前見て歩かないとい危ないよ。そしてそんなガン見にもめげず自分をひたすら見つめ続ける君もすごいよ、転校生。だがあの無感情の瞳で見られても不快というか嫌な気持ちになるだけだった。残念ながら。というかどうしてこんなに見られてるの、疑問だ。あ、けいちゃんが躊躇いた。

とうとう屋上に着いたわけだが、これからどうすればいいのか。階

段を上つていいる途中に始まつてしまつた授業に戻るにしても転校生が待ち構えているあの出入り口に近寄るのは気が引ける。・・・うわー、自爆つてこいつことなのか。

「・・なあ、何であいつさつきからお前のことつけられてるわけ?」

「エッチが知りたいくらうだよ・・・。」

身を寄せ合つてあからさまなヒソヒソ話をする。遙香ちゃんがいれば絶対怒るであろう顔の近さだがぶっちゃけ今はそんなのどうでもいい。だが意外なことに転校生まで怒り始めた。あの無感情の瞳に怒りの感情を浮かべてこちらに歩み寄ってきた。音もなく。傍までくねと自分の腕を掴み引っ張ってきた。

「やめて。」

一言だけ言い放つ。一気にけいちゃんの眉間に皺が寄つた。・・・すごい、迫力だよ。怖いから少しだけ視線をずらす。法螺それを見つめる（睨み付ける？）転校生に心中で拍手だ。

「おい、その手え放せよ。」

「いや。」

「は?いやじゃねえよ。つーかさつきからついてきやがつて気持ち悪いんだよ。」

「黙つて。あんたについてきてるわけじゃない。」

「あ、あ?」

けいちゃんの手が転校生へと伸び、胸元をがつと掴む・・・のを寸前で止めた。

「ちょっと、やめなよ。何でそんな喧嘩腰なわけ？」

転校生は相変わらずの無表情。けいちゃんは顔を顰めた。自分が掴んでいた手を逆に掴むと引き寄せる。おいおい、遙香ちゃんに見られたら自分どうすればいいんだよ、黙つていじめられerつて言いつかい！

と、もう片方の手を転校生が掴んだ。おいおい、一体何なんだよ自分の腕をちぎりたいのかい！自分は玩具じゃないんだよ！（ケツ

「あー、もう放してよ。」

半ば無理矢理に振り払うと1歩2歩と後ろに下がる。少し距離をあけた。・・・何だってこんなことに。これが果たして一般的な普通なのか？いいや、まさか！そもそもけいちゃんだつてむきになりすぎなんだ。君には遙香ちゃんという可愛い恋人がいるじゃないか！まあ、まずは転校生だ。

「ねえ、何で自分の後をつけるわけ？さすがに嫌になつてきたんだけど。」「

苛立つを隠さずそのままの面葉を投げる。せこかやまと一緒にまつわべく

見つめる。

やがて転校生はゆっくりと口を開いた。

つからねる。（後書き）

転校生の名前を出すタイミング見失つてしましました。

「んな理由。んな過去。

「ねえ、何で自分の後をつけるわけ? さすがに嫌になつてきたんだけど。」

しばらく黙っていた転校生は、無表情のまま口を開いた。

「貴方が、ゆうちゃんなんだから。」

「…………。
…………?
…………うん?」

「はあ?」

「あー……、確かに言われてみれば……うん、ゆうちゃんだ。
「ゆうちゃんを知ってるの?」

「ん、まあ……一番好きだな。」

「以外。ちょっとだけあなたのランクが上がったわ。やかんからド

ラム缶くらこ。」

「いや、それどんな基準だよ。意味わかんねえ。」「いやいや、むしろ君たちこそ意味分かんないよ。」

正直に言つてやると、けいちゃんさんは少し視線を逸らした。転校生はまつすぐじゅりを見つめてくる。

「ゆつちゃん。」

「いや、ゆつちゃんって誰なのさ。」

「それは貴方。」

「・・・名前に“ゆ”なんて一文字も入つてないんだけど。」

「いいえ、貴方はゆつちゃんよ。」

続けようと思えば、ずっと続きそうだったので黙る。まさかここまで話が通じない人だつただなんて。その上、人の後をつけるというストーカー行為とも言えることをしている非常識人だ。だがけいちやんとは話が通じていた。まさか今この場では自分が非常識な人間になつているのだろうか。いやまさかそれはないだろう。黙つたままけいちやんを見る。視線を感じてチラッとこっちを見たけいちやんは少し溜息をついた。

「んー・・・と、ゆつちゃんは“小林 ゆとり”、つづー名前で“にしき”アイツをフルボッコ”、つづー名前のアニメのキャラクター。あまり出番もないし、見た目もそこまでよくない。ランキングでも中途半端にいるようなキャラ。」

「それでも一部の人間にはかなりの人気を得てるの。」

「・・・一部の人間って主に。」

「口リコン。」

即答でそう答えた転校生を見た後、さつき何気に一番好き発言をし

ていたけいちゃんを見る。もう視線を逸らすどころか背を向けていた。・・・そりいえば、けいちゃんの秘密の引き出し（複数存在）にはひとつでもマニアックなものが一杯詰め込んであった気がする。

・・・・・！ そりか、これが所謂隠れヲタク！

自分にまで隠していただなんて、ちょっと寂しい気分にもなつたがけいちゃんももう大人ということだろう。ちなみに自分は中1くらいいにはけいちゃんにアレコレ報告するのをやめていた。さらになみにけいちゃんは今でも新しいことを始めたり、彼女が出来たり別れたりすると報告してくれる。あ、話がそれたね。

「・・・つまり、その口コロンのストライクゾーンなキャラに自分がそつくりだと。」

「あー、そりな「いいえ、貴方はゆっちゃんよ。」・・・・遮んなよ、それにゆっちゃんはあくまでもアニメのキャラクタ「黙つて。ゆっちゃんは実在したの。貴方はドラム缶からヤモリに格下げ。」・・だから基準が分かんねえよ。」

大分けいちゃんの言葉を遮りながら、転校生がいつ。まさかそんな理由でこれまで、いやこれから付き纏われなければいけないのでどうか。そんな冗談じゃない！

「君はどうかしてるよ。別に現実の世界と仮想の世界を一緒にするのは構わないけど自分を巻き込まないで欲しいね。」

「君じやない、七海。^{ななみ}」

「・・・七海、自分を、アニメのキャラと、被せるな。」

ゆっくりと区切りながらそう言つ。まっすぐ見てからビとなくうつとりとしていた転校生、もとい七海は田を潤ませ恍惚とした表情で溜息をついた。・・・分かつてないな、こいつ。

くそ、冗談じやない。変なことをに巻き込まれるのは「めんだ。まつすぐ屋上の出口に向かつて走り出した。後ろからけいちゃんの呼ぶ声が聞こえる。そして自分に続いて走り出す音も。それが七海が追いかけてきたからだと分かるのに時間なんていらなかつた。

今までにないくらいの速さで階段を下り廊下を走り抜け靴を履き、鞄を忘れたことを頭の片隅に思い浮かべて、学校から飛び出した。

見たことないくらいの速さで学校の校庭を走り去る幼馴染みを屋上から見送る。

・・・まさかこんなところでヲタクだとばらすことになるとは思つても見なかつた。だが、につくきアイツをフルボッコ 略してにくボッコを知つてる人間なんてそうそういない。それくらいマニアックなアニメだ。それを知つている同志をやつと見つけられたんだ。
・・・まあ、何かすんげー変なヤツだけど。

改めて、自分の幼馴染みである斎藤小鳥について考える。

あいつのことははつきり言つて大好きだ。家族以上に身近だし、家族以上に大切に思つてゐる。中2くらいになるとなくなつたが、俺は父親から虐待を受けていた。母親は見てるだけ。妹は機嫌取りに

必死。

避難先はもちろん小鳥の家だった。小鳥と、小鳥の家族はそんな俺を匿ってくれた。一時期は優しい家族を持った小鳥に嫉妬して辛く当たつたりしたが気にせず俺を助けることに一生懸命だった。（だが中3くらいになつてそのときの仕返しを受けた。あいつは根に持つしネチネチしてる。）

そんな小鳥がひとりになつたのは何時だつただろうか。

確かに中1くらいに小鳥の父が事故で死んでしまつた。すんごく悲しかつたし、珍しく大声で泣きじやくつていた小鳥と一緒に泣いた。その後、中2になつて虐待もされなくなつて小鳥と一緒に遊び歩いていた俺が、中3に久々に小鳥の家族、小鳥の母にに会いに行つたとき。今は丁度留守だからと嫌がる小鳥を押さえ込んでリビングで待つていた。ずっと。日が暮れて、夜になつて、朝になつて、また昼になつて、日が暮れて。そのくらいになつて小鳥が急に泣き出した。父が死んだ時みたいに大声で泣きじやくつた。もう、お母さんは帰つてこないんだ、つて。

中2の俺への虐待がなくなつたころに小鳥の母が出て行つてしまつたらしい。置いてあつた手紙には簡単に言えば、他の男のとこへ行く。毎月仕送りはあるらしい。必要な書類も送れば、諸々を記入して送り返してくれるらしい。だが会いに行くことも来てくれることもないらしい。

泣きじやくる小鳥を呆然と見ながら、今までそんな素振りも全く見せなかつた小鳥に単純に驚いていた。ただただ、驚いて呆然と小鳥を見ていただけだった。

しばらくして泣き止んだ小鳥に今更だが大丈夫かと聞いてみた。どことなくすつきりした小鳥が言った。

「けいちゃんがいるから、大丈夫。」

次には俺が泣いていた。

そんな小鳥に、最近とある感情を抱く。もつと話したい、触りたい、キスしたい、あわよくばその先へ・・・・・そんな感情だ。

これは恋というヤツなんだろう。今までカノジョたちより比べものにならないくらい強い感情だし今のカノジョは俺の気持ちが今以上に強くならないようためのものだ。この気持ちに気付いたのはごく最近。前以上に小鳥が可愛く見えて仕方ない。おまけに怜といふ「ミがくつづいてきた。だから悩む。

そう悩むんだ。小鳥は言った。俺がいるから大丈夫だと。つまりそれは俺という家族とも言えるものがいるから大丈夫ということなんだろう。小鳥と俺の今の関係を崩してしまっていいのか。
俺は悩む。

いんな理由。いんな過去。（後書き）

転校生の恋愛。小鳥たちとカーネーションの過去。アニメの恋愛（
これ重複）。

不運な自分。

もういい加減足に力が入らない。だからといって足を止めれば必ずヤツが追いついてくる。くそ、あれもチートキャラのかけいちゃんの仲間なのかよ。いい加減にして欲しい。もしかしてこれってチートキャラを引き寄せる自分の体质なのか？・・・いいや、まさかそんな！ありえないよね・・・ね？

人混みの中を走るのは危ないし、それ以前に人に奇異の目で見られたくないから却下。というと狭いビルとビルの間。人気のない路地裏や閑散とした住宅街。店の中に逃げ込むことも考えたが逆に追いつめられる気がする。もう一つそのこと人の家にでも上がり込もうか。ほら、小学校の時とかに教わっただろう、近所の皆さんは味方です助けを求めましょう！みたいな。でもあれって結構迷惑だよね、押しかけられたご近所さんにしたら。

あれ、何かクラクラしてきた。酸欠ですか、過呼吸とかやめてよ本当に。必死に休める場所を考えてみたが思いつかなかつた。何処に行つても捕まるイメージしか思いつかない。用心深い自分の思考が恨めしい。

ちらりと、後ろを見ると誰もいなかつた。・・・あれ。徐々に速度を落とす。が、そこで後悔した。もう足がぐくぐくで力が入らない。つまり、もう走れないということだ。小さく悩むと近くに小さな公園があつた。ふらふらとそこに向かって歩き、人目につかない場所にあつたベンチに座る。・・・何かもう、駄目だ。もう絶対立てない歩けない走れない。見つからないことを祈るばかりだ。そつと目を閉じた。

肌寒さに目が醒めた。・・・・まさかこんなところでこんな状況で寝ちゃうなんて、不覚だ。しかも寒い。肌寒いどころじゃない寒い。あんなに走つてかいた汗が乾いていた。制服のシャツがほんのり湿つていてさらには気持ち悪い。寝たはずなのに体が更にだるくなつてる。動けないし動きたくない。携帯・・・は今日に限つて鞄の中だし、そもそも誰に連絡すればいいんだ。けいちゃんのはメモリから消去しちゃつたし、覚えてるわけもない。親は・・・うん、ないな。何だか泣きたくなつてきた。そもそもどうして追いかけられなくちゃいけないんだ。怖かつた、あの無表情でだが目だけは爛々とまるで獲物を狩る猛獸の如く光つてた七海はとても恐ろしかつた。

こう考えてみると自分は最近、ひどく不運な気がする。セフレに間違われるわ、遙香ちゃんたけに呼び出されるし、付きまとわれて追いかけられてこの様だ。

何でけいちゃんの連絡先を消さなくちゃいけなかつたんだ。どうして消しちゃつたんだ、親に頼れない以上、自分にはけいちゃんしかないのに。けいちゃんもけいちゃんだ。どうして、・・・・・・みつともないなあ、自分。ずっと鼻水をすする。溢れた涙をこする。そのことで腕で覆つてた目が周りを見れるようになるわけで、中途半端に手を上げたままの怜が視界に飛び込んできたわけで。・・・お互にしばらく硬直したまま見つめ合つたわけでした。

「・・・助かつたよ、ありがと。」
「いや、気にしなくていい。この前の礼だ。」

場所は怜の家。暖かいシャワーと洗濯機を貸してもらつたうことになつた。けいちゃんの家に泊まつたときみたいな感覚だつたせいか物凄く後悔した。何故つて・・・着替え。下着まで洗つてしまつたのは後悔どころじやない恥ずかしい。恥ずかしすぎて怜の顔を見たくない。ああ、絶対図々しいヤツだと思われたんじやないか。違うんだよ、普段はこんななんじや・・・！やめてくれ何でそんななま暖かい目で見るんだ。そりや、貸してもらつた服は大きすぎたさダボダボだよ！まるで子供が大人の服を着たみたいだよ！だからつて何だ、別にいいじゃないか！

けつとやさぐれる。出来るだけ怜から離れよう。だつて、自分今下着何もつけてないし、怜の長袖を着てるだけだズボンを穿くのは何だかちよつと抵抗がある。そう考えるだけで何だか死にたくなってきた。恥ずかしい、恥ずかしい。・・・何だよ、やめろ近づくなあつちへ行つてくれ！だが怜はお構いなしに近づくとあらう事が抱きしめてきやがつた。110番するぞ。

耳元に顔を近付けた怜はそつと囁く。何故泣いていたのか、と。

「空が青くて広すぎて思わず涙が。」
「・・・どうか、広いが曇つていて残念だつたな。」
「大量の汗が一気に目に突撃してきたんだ。」
「・・・どうか、全ての汗が乾いていてひどく寒そうだつたな。」
「世の中が冷たすぎて思わず。」
「・・・どうか、大変だつたな。」

ぎゅっと抱き込まれると同時にそつと頭を撫でられる。あ、あつたかい。あれ、何だか随分と心地がいい。思わず、うとうと目を閉じた。が、頭を撫でていないうち片方の手が不穏な動きをし始めた。

「何、通報してもいいの？」

「・・・無防備なお前を心配してな。」

また囁かれると体がびくりと跳ねた。だつてさつきより近い、というか耳に齧がくつついてるんだよね、これが。

「つそりや、ビツサ。もういいから離れてよ。」

今下着つけてないんだよ馬鹿野郎、といつ言葉をそつと喉の奥に押し込んだ。

「好きな人間に自分の服を着てもうひとつは、思ったよりくるな。」

「

何処にだよ！？

やめてよ何だか大人な雰囲気が漂ってきたよ。つておい、何処触つてるんだ。抵抗してもその意味は全くないのがすごく悔しい。

「・・・そんなとこ触つて楽しい？」

「ああ楽しい、それに可愛らしげな、舐めてい「本当に通報するよ？」・・・事実だ。」

尚更悪いよ、変態。つ、と服越しに胸の頂をなぞられた。びくと体揺れた。

「ね、ね。やめって、よ。へんたつ・・・うん」

「声も變らしい。もっと聞きたい。」

ぞわぞわとした感覚が背筋を上つてくる。何だか頭がぼーつしてきた。いやこれはぐらぐらしてきた、のまづが正しい気がする。体もだるい動きたくない。でもだからといって、まだ会つて2回田の男とするつもりもないし、それにちよつと怖い。・・・いや、かなり怖い。

「ひつ・・・ん。やまつ」

「・・・小鳥。」

「んや、こわ・・・、怜、怖い」

今田はちよつと弱氣な自分が怖いと言つた瞬間、怜が物凄い勢いで離れた。ちよつとぽかんとする。

「悪い、少しいやかなり調子に乗つた。許してくれるか?嫌いにはならないでくれ。」
「・・・それじゃ最初からやるなよ。」
「すまない。」

そう狼狽えながら言い、離れていく怜に少しほととする。・・・それにもくらくらする。さつきより酷い。あれ、これくらくらよりぐるぐるだぞ。ぐるんぐるんと回る世界に吐き気がする。バランスをとれなくて、横に倒れる。怜が自分を呼ぶ声がした気がしたが、気を失った自分が確かめられるわけもなかつた。

唐突に横に倒れた小鳥に慌てて近づく。少し躊躇つた後、抱き起こしてみると体が随分と熱い。

「・・・熱か。」

ぽつりと呟いたが、その後すぐに小さく呻く。抱きしめているときは只単に羞恥によるものだと思つていた。都合良く解放した俺なんて2階から飛び降りて死ねばいい。

そう考えた後、小鳥を見下ろす。小鳥にとつては大きいといえ、長袖から大分足が見えていた。白い足が眩しい。触りたい、あわよくば舐め回したい。

「・・・生殺し。」

そつぽつとまた呟いた。

不運な自分。（後書き）

佐藤 怜。言わずもがな変態であります。

風邪。

億劫だったか仕方なく目を開けた。

変な夢を見た。さすが夢、何か色々ぐりやぐりやに混ざっていた。見た目は今と変わらないのに中身が幼児化している怜に、あれが欲しいというせひやんのぬいぐるみを指しながら自分にじこねるけいちやん。あの無表情が嘘のようにキラシキラの笑顔でポケットティッシュを配る七海。そして、それを微笑ましげに見る母と対照的に悲しそうな父がいて。・・・・何だらう、すんごくカオスな夢だとね。これ。

おとーさん、悲しい顔しなくても自分は別にそんな・・・・。いやまあ、不運だと嘆いたけど。だって・・・ねえ？（盛大に溜息

改めて部屋を見渡すと、そこは見慣れた自分の部屋だった。怜の家でそれこそ色々あつて最後に意識失つてしまつた筈なのですが・・・まさか怜が運んでくれたんだろうか。

怠い体を起こして、もう一度見渡す。あー、頭ぐるんぐるんする。ふと、机の上にメモらしきものを発見した。フラフラとそこへ歩み寄り（自分としてはまつすぐ歩いて）メモを取る。

この雑で汚い男らしい字はけいちゃんだね。怜から連絡受けて家に連れ帰つたこと、冷蔵庫におかゆがあることが書いてあった。・・・おかゆ。今食べれる気分じゃないことが惜しい。けいちゃんの手料理なんてそういう食べれないのに。というか人に作つてもらえること自体少ないのに。・・・。

ちょっと虚しい気分になつた。そういうや風邪薬あつたかな。あまり風邪を引かないくせに一度引くとひどいし長いしで、辛いんだよねえ。何というかすごい執拗というか。
・・・病院に行こうかな。ああ、でも寝たい。怠い。辛い。おええつ。

そして病院にいる。

ひどく悩んだが、やつぱり診察しても「」ことが一番だろう。外出ですぐに後悔したが、いつも以上に病院が遠く感じた。けいちゃん帰つてくるの待てばよかつたかな。って思つたり。

受付を終えて待つ。平口なおかけかすいていた。痛む頭に少し顔を覆めて、椅子に不覚腰掛ける。すぐに隣に誰かが座つた。こんなに椅子が空いてるんだから、他の椅子に座ればいいのに。何となく、ちらりと見たあとすぐに目をそらした。

何故か。決まっている相手もこちらを見ていたからだ。知らない人。しかも何かすんごく美形だった。目の端でも分かる派手な色だ。金髪に、ちょっとだけ見た目は碧だった。つまり、外国人。

やめろ、何でそんなに見るんだ。その口は何だ飾りか最近見られてばっかりだよ畜生！

結局、熟女な看護婦さんに名前を呼ばれるまで視線が逸らされることができなかつた。・・・あの変なアニメを知つてゐやつじやあるまい。七海タイプじゃないことを祈るばかりだ。

診察結果は、インフルエンザでした。薬を貰つて家路につく。病院から歩いてしばらくしたとき、けいちゃんがバイクに乗つて通りかかりました。遙香ちゃんを乗せて。

・・・へー、幼馴染みが熱で大変なときにカノジョさんとラブラブですか！（ケツ

更に不快な気分になつて気にせず、歩くことにした。

「おい、小鳥。お前こんなトコで何してんだよ。」

「病院。」

「はあ～おとなしく家で寝てろよ馬鹿。」

むしとしてけいちやんを睨み付ける。何でそんなことを言われなくちゃいけないかよく分からぬ。だって薬なかつたんだから仕方ないじゃないか。

「・・・別に君たちの邪魔してるわけじゃないんだからいいだろ。」

「

溜息をついてせつと歩き出した。

後ろから遙香ちゃんの間延びした声が聞こえる。・・・ああ、不快だ。気持ち悪い。何で自分がこんな、惨めな気分にならないといけないんだ。

自分も恋人作るつかな。頑張れば、付き合ってくれる人いると思う。多分。

ぐいっと手を掴まれる。その拍子に頭が揺れて気持ち悪かった。・・・くそ、何なんだよ。睨もうとしてが、頭にヘルメットを被せられて中断することになった。

ちょっと乱暴に後ろに乗せられて、小さい行くぞ、の合図でバイクが出発する。

後ろから遙香ちゃんのわめき声が聞こえた。

「うやんと携帯に俺の連絡先入れ直しといっただ。連絡くれりや、送り迎えでも何でもするし。怜にだつて連絡入れれば学校早退してまでやると思ひばへ・・・頼むから、いつこうときぐりこ頼つてくれよ。」

別に頬が緩んでるのは嬉しいわけじゃないからね?

何とかほひ、・・・わつー遙香ちやんがまつり思つただけだからね!?(落ち着け)

それぞれの思考。

「頭痛こよつな……気がする。」

「気がするじゃねえよ、馬鹿が。」

「ふん、何さ。君が病人の自分をおいてカノジョトイチャイチャしてたんだろ。」

「……別に、そんな感じじゃねえよ。迎えに来いってうかがつたんだよ。」

「へー、と氣のない返事を返す。

結局遙香ちゃんより優先してくれたのだから、まあ、許してやろう。

「もやもやと布団の中こもぐる。あー、頭いたいい……。あ、そつだと思こ出し布団から田の辺の辺りだけを出す。

「あの、あ、ありがと……。」

「…………別に。」

いつもより長かった沈黙。な、なんだよ。お礼言つたっていいじゃないか。そもそも君がずっとこっち見てるからだ。せめてベッドの隣に座ればいいじゃんか！お陰でどもつちやつたよ。（ため息）けいぢゅんせじょりべりべりの近くでこたよつだが、ドアが閉まる音がしたから出でこつたのだから。

よし、寝よう。

冷蔵庫のなかを覗くとお粥が置いてあった。

何だよ、一口も食べてねえのか。大丈夫か、おい。

熱が40度近くあつたらしいから仕方ないのか？

アイツが風邪引くなんて珍しい。最後に引いたのは何時だつたか、まだ小鳥の母がいたときだつたような。

ひねくれてつから普段あまり甘えない分、風邪だとそういう時に田一杯甘える。その甘え方がこれまた可愛かった。

ひとりやだと怠い体を必死に動かして小鳥母を追いかけたり、小鳥母の膝に額をぐりぐり擦り付けたり。しがみついたまま眠りについたり。・・・あ、やべ、にやけてきた。

にしてもなあ・・・、小鳥母、一体何で出ていつちまつたのか。

嫌いになりたくはないが、小鳥があんなに泣くくらい傷付けたわけだしそれに親なのに子供を捨てるという行為があつたし嫌いになつちまうよなー。

小鳥は一体どう思つてるのか。全然わからんねー。アイツこうこうの隠すの上手いんだよなー。

粥をだして温めなおしておく。

ぶつちやけこういうのつて苦手なんだよな、俺料理とか無理無理。

小鳥の料理上手いし。まあ、粥ぐらいなら作れるけどよー。

料理といいやー、あの女、料理得意とかいいながらくそまじいもん食わせやがつて。しかも帰つたら怜の野郎が鍋食つてるじ。

くそー、俺も鍋食いたかつたー！

ジリリコリ、とチャイムの音がする。

何かこいつ、普段ぴんぽーんつつーヤツだから慣れないねえとか思いつつ、ドアを開ける。

怜がいた。

玄関チャイムを押した後、出てきたのはやはり楠木だった。予想していたとはえ不快と思う。小鳥と同棲してみたい。いや、したい。案内を受け、リビングのソファに座る。此処で小鳥は俺に鍋を振る舞つてくれた。それが楠木のためだったのか、俺のためだったのか分からぬ。多分前者だろう。やはり不快に思う。小鳥が俺のために飯を用意してくれるのならそれが例え生肉だろうが虫だろうが喜んで食べよう。

小鳥はどうやら寝てるらしい。覗きたい衝動を押し止める。

おかしい、小鳥が俺の家で倒れた日、思う存分寝顔を見たはずなのだ。やはりあれだけでは足りなかつたか。せめてカメラにでも撮つておけば……後悔した。

それにしても先程から台所のほうがうるさい。それを楠木に指摘すれば慌てたように台所へ駆け込んで行つた。

楠木もいなくなつことだしそろそろ小鳥の様子を見てこよ。

小鳥の部屋だと思われる扉をそつと開ける。微かな寝息を聞こえてきた。それだけで俺の心臓が高鳴る。

扉を閉めるのを忘れずにベッドへ近づく。器用に顔だけを出した状態で、更に猫のように丸まりながら眠る小鳥。・・・ああ、何て愛らしい。瞬きを忘れて見ていたせいか渴いた眼球を、閉じることがこれほどまでも辛いとは。

小鳥の一分一秒すべてを自分のモノにしてしまったかった。

トの階から、ジリリリコロトコツコツ玄関チャイムの音がした。

玄関の音がするボタンを押して出てきたのは、疲れたような顔をしたゆつちゃんのストーカーだった。

あんたみたいな顔が何故そんなに疲れた顔をしてるの？あんたに会つてしまつた七海のほうが疲れた顔をしたい。

そもそも何であんた出てきたの、さすがストーカー。七海でさえまだ手に入れていらないゆつちゃん家の鍵を持っているのね。寄こせ。

「あー・・・、何でいんの？」

「うるせー。」

「閉める。」

「ゆつちゃんが風邪だからに決まってる。馬鹿め。」

眉間に皺を寄せてブツブツと何か言つてゐる。呪いの言葉？あんたにそんな高度なものを使えるとは思えないけど・・・やめておいたほうがいい、呪いは跳ね返つてきたりするんだもの。つて、魔女つこ ハト子ちゃん（アニメ）のハト子ちゃんの弟子の弟子が言つてた。

家に入れようとして無礼者をわざと押しのけて家に入る。ゆつちゃんの部屋は2階。
待つててね、ゆつちゃん。

それぞれの思考。（後書き）

みんなの頭ん中は「こんな感じだよー、みたいな。

七海ちゃんの一人称は七海、に決定した！

お見舞い。(前書き)

ちなみにこの物語の時間軸は高一の時です。
わー今更でびっくり!

お見舞い。

「・・・それでみんなお見舞いにきてくれたんだ」

ベッドからけいちゃんと怜、それと・・・家の場所教えた覚えな
いけど七海を見上げる。

けいちゃんは申し訳なさそうに、怜は熱の籠もつた手で、七海は
相変わらずの無表情でこちらを見返してくる。・・・皆から見下ろ
されるのは何というか、気分が悪いというか圧迫感があるといつか・
・・・・・まあ、いいや。

「お見舞い。」

ゆづくじと上半身だけを起こす。

すると七海がこちらにぐっと何かを押しつけてきた。ちくちくと
した何かが頬に触れる。視界に入つたそれは紛れもない、藁人形で
ある。・・・・うん？

そつと受け取つて改めてじっくり見ても、やっぱりそれは藁人形
だつた。ついでに五寸釘と金槌を渡される。

「・・・」これは?
「お見舞い。」

「「これが、お見舞い？」

「ぐりと頷く七海。

「これでどうじろと言つのだろうか。頭イタイし急くて仕方ないと
きに誰かを呪い殺すのだろうか。

馬鹿だろ？」

「あー・・・、あのな小鳥。ゆつちゃんは風邪を引いたら毎回、
呪うんだ。」

「・・・他人を？身代わりこでもして？」

「んー、そんな感じ？」

ちなみに自分はそんな馬鹿じやない。

「それは一次元での話だろ？。」

怜が言つ。

すかさずけいちゃんが七海が自分をアニメのキャラと重ねている
ことを話す。いい説明キャラだ、けいちゃん。（親指ぐつ）

七海が何かを期待してゐようとしている。が、気にしな
い。

「小鳥、腹空いてるか？」

「・・・分かんない。」

「んー、でもちゅうとも食つとこたまつがこと細づばへ

ちゅうと持つてくんな、と踵を返そつとして立ち止まつた。
そして心配そうに七海を見張つてゐるよ、その気持ちすつじく分か
るよ、けいせん。

最終的に冷て七海を見張つてゐるよ、後ろ髪を盛大
に引つ張られそつな感じで出て行つた。
温めなおすにしても数分だつて、まあ、さすがに数分で何かが
起ることはないだろ。ひんこりることはないだらう。

自分はまたベッドに身体を寝かした。

で、だ。

「小鳥、風邪を俺にうつしてくれていい。」
「

「ゆつせん、こんな男よつ七海こいつ。」

自分の感覚が正しければけいちゃんが出て行ってから、1分も経
つてないはずだ。経つてないはずだが何故にこうなつた。
ベッドに乗り上げている冷と七海。ちなみに左に七海、右に冷だ。
するり、と冷の手が頬を撫で、七海が肩に触れる。悲鳴は口の中
に飲み込んだ。

確かことの始まりは冷のあの時はすまない、といふ言葉だった氣

がする。あの時とはもちろん、あれだ。うん……それだ。

別にいいよ、と自分は返した。だが怜はそれでは気が済まないようで更に謝りそして何故か自分のどこに欲情したか、という話になつた。そして小鳥じやないわゆつちゃんよ、と七海が乱入。そして今に至る。

・・・・けいちゃん、はーやーーーカムバック！

丁度良く、がちゃりとドアが開いた。もちろん開けたのはけいちんだ。思ったより早い帰りに感謝した心の奥底から。

おかゆが入つてると思われる小鍋を持って入つてきたけいちゃんは部屋に一步入つた状態で固まつた。

「やーーー、どうしてそうなつた。」

顔を引きつらせたけいちゃんが小さく呟いた。そして溜息をつくと机に小鍋を置いて、こちらに歩いてくる。
七海を掴んで放り投げ、怜には田で降つるみひで謡る。・・・・田が据わつてるよ、けいちゃん。

「あんなー、俺は確かに七海を見張るよつて言つたよなあ？」

「先にゆつちゃんに絡んだのはこの根暗男よ。風邪を引いたからつて我慢したこと。」

「先にベッドに乗り上げたのはこの女だ。病人だからと遠慮していたのにな。」

ほぼ同時に2人が言った。

疲れた顔しているけいちゃんと田代が合図。おしゃべ申し訳なさそうにされた。・・・別にけいちゃんは悪くないよ。

「・・・病人だつていう意識があるなら、やつとじつとこられ。

小鍋を持ってきたけいちゃんがむりに疲れたよつて言つた。その通りだと思わず頷く。

怜と七海がまたほぼ同時に謝つた。・・・やつからぬぴつたりだよ。

けいちゃんは椅子をベッドの近くに持つてへりに座り、レンゲにすべつて口元に持つてくれる。

「・・・え。」

「ん?・・・あー、やつだな。寝てちぢめ食つてこみな。」

そういうで抱きかかえるよつてして自分を起すと、改めて口元持つてへり。・・・え。

「私もやる。」
「・・・お前は何か不安だ。」
「俺は寧ろされたいが。」
「おい、病人に何させらつもつだよ。てか、やらせねー、ぜつて

— やひせねえか「わ、ちゅうヒー」

い、一斉に口を開くやつ見るなー。びっくりするじゃないかつ！
そして黙らないでほしい。

「ジ・・・自分で、たびえ、食べられる。」

初めて知ったがどうやら沈黙に弱いらしい自分はまたもどもりながら、自分病人なのに、とかお見舞いちょっと嬉しくて思いつつ、言つた。

お見舞い。（後書き）

更新空いてすみません。
暑いですね、とみせかて最近涼しくて嬉しいです。

お見舞い。2（前書き）

長い間、お待たせ致しました。
まだまだつま恋つてくださる方、もう少し恋つてらんねーよーな方。
ありがとうございますー。

風邪を引いて寝込んでしまった自分。お見舞いといつ名の襲撃。“
はい、あーん”攻撃。迫りくる魔の手から逃げ切れるのか！
どうなる自分、どうする自分！？

なーてね。今の状況を簡単にまとめてみたんだ。何か三流アニメ
の次回予告みたいになつたけど…。

え？ これは現実逃避じゃないかつて？

いやだなあ、はい、あーんされてるんだよ？

いや、まあ確かに高校生ならまだ生暖かい目で見れるかもしれない
い。だ・が！自分はこういつた行為がすっごく恥ずかしい！平然と
やってのけるヤツ本当に信じられない！

「といつわけで自分で食べられる。」

「いやいや、何がといつわけでだよ。」

「恥ずかしいから却下。」

「はいそれ却下。俺はお前をべつたべたに甘やかしたいんだよ。」

にやりとけいちゃんが笑う。

・・・そういう無駄に甘いつたらしい笑顔を引っ込めてほしいな
あ。カノジョさんにでしどけってんだ（ケツ

「小鳥、楠木のが嫌なら俺がしよう。」

「別に誰が嫌だとかの問題じゃないからね?」

「七海のほうがいいに決まってる。」

「だから・・・!」

「はあ? 気心の知れた俺の方がいいだろーが、普通。」「聞けよ。」

話を聞かない人たちが多いのは何でなのかなあ・・・。
まあ、非凡じゃないちゃんと周りに集まってくるような人たちが平凡な自分の話なんか聞かないんだろうけどさ。

ちょっと落ち着くために深呼吸してみるが、風邪なのを忘れてました。乾いた空気が喉に入ると咳きが出たりしまったりしませんか?自分はします。

というわけで、盛大に咳き込んでしまったわけですが。
あーでもない、こーでもないと言っていた人たちがいきなりこつちをぱつと見たわけですが。
・・・こういうときだけぴたりと同じ行動しないで頂きたいのですが。

おいでうしてくれるんだっていうような感じで会話している(ような気がする)。

七海がおもむろに藁人形を出すと、ぐつとこっちに押し付けてきた。無表情で。

「大丈夫?・・・藁人形。」

「悪い、ふざけすぎた。あと藁人形しまおつか。」「・・・悪かった。」

順に七海、けいちゃん、怜だ。

謝るのなら最初からするなと思つた。少し睨んでしまつたのは仕方ないだろう。そして藁人形を押しつけないで欲しい。

気まずそうにしてゐることつらだが、3人に見つめられるなお粥を食べた自分も気まずかつた。すゞく。

それにお粥は、何故か苦みと無駄に甘いといつ矛盾している味が同居してました。砂糖をぶちまけた上に焦がしたと自分は予想しましたまる、つと。

口の中がベタベタする気がする。

とはいへ折角作つてもらつたものを残したくないし、久しぶりに自分以外の手で作られた料理なのだから食べきりたかった。1人で外食なんて寂しいだろ。・・・けいちゃんは自分が作つたの食べた
いって言つし。

でも試食と言つてまずそれを食べた怜はガチッと音がしそうなくらい硬直し、米3粒ほどそろりと口に入れた七海が盛大に顔を歪ませた（美人が台無しだよ！）。そして最後に試食し、顔色を真つ青に変えた作つたけいちゃん自身によつて取り上げられてしまつた。
・・・食べようとしてるんだから別に取り上げなくたつていいいじやないか。

ちょっと不貞腐れでいると、怜がそつとお茶を渡してくれた。

ありがたく貰つておく。

まあ、胸焼けがする気がするけどお腹一杯になつたし、薬を飲まなくちゃな。

「はい、ゆつちゃん。薬。」

「あ、ありがとう。」

「ゆつちゃん、寒いでしょ？添い寝。」

ちょっと頬を染めて言ひ七海。 . . . いや、一緒に寝たりとかしないからね？

「いや・・・、風邪移したら申し訳ないから」

「心配、してくれるの？」

「あ・・・ああ、うん、まあ。」

本格的に紅色に染まり始めた七海の頬。 . . . 何だかこっちも照れるんだけど。

「ひつやつてみるとやっぱひつこの子は美少女だ。前下がりの黒い髪なんてキューティクル満載だし、少しつり上がり気味の皿は長い睫毛で縁取られている。

無表情なせいで近寄りがたい雰囲氣があるのだが、これもこれでクールビューティってヤツだろうか。

まあ、それ以前に頭の中が随分とぶつ飛んでいることが問題なのだけれども。

「・・・なんだかなあ。」

「ん、どうした？」

「いや・・・なんか残念だな、ヒ。」

「あー・・・、今更じやね？」「・・・。」

そうなんだけど。

あの無表情がなんともなあ、と小さく呟く。

それを聞いたけいちゃんはあいつはどうなの、と怜を指差した。

そう言われば・・・確かに。

佐藤怜という人。

佐藤怜は確かにいつも無表情だった。

それじゃ、何故言われて改めて常に無表情だと気付くのか。考えればすぐにピンときた。

目は口ほどにものを言ひ、目は心の鏡、と言つたもので彼の目は随分と感情豊かだ。

例えば、今。

彼の目はなんというか、ねつとりしている。

熱い視線、と言うのかな、これ。ちょっと顔がひきつる。ねつちょりばつちり絡めとられそうだ。

自分はそつと視線を逸らした。・・・そんな目でみないでくれ。

俺、佐藤怜は最近自分が思いの外感情豊かだということに気が付いた。

荒藤小鳥のお陰で。

幼い頃から泣くことはあまりなかつた。

両親は手のかからない子だと褒め、急いで仕事に出掛けていった。

俺は両親の前だけでは無駄に愛想が良い家政婦一人と小学校に入学するまで、大して代わり映えのしない日々を過ごした。

思うに、この時に一般的に過ごしていれば今のように感情に起伏のない人間にはならなかつただろう。

彼について知つてることは随分と少ない。染めたこともないだろう
女顔負けの綺麗な黒い髪は少し長めだ。面倒くさがり屋の男子がギ
リギリまで伸ばしたようなもつさりとした髪型に見えるが、彼には
何故か似合っていた。前髪はちゃんと整えてあるからかもしない。
切れ長の瞳に見つめられれば逸らしていいのか、つい迷ってしまう
(つまり目力がすごい)。

全国的に有名な進学校に通つてゐるし、顔もいい(無表情だが)、
家は金持ちらしいし。モテる要素は揃つてゐる。・・・インテリイケ
メンつてやつか。

他にはどういう経緯でかはしらないが、けいちゃんと友人だとい
うこと。家に泊まらせると約束をするくらいなのだからそれなりに仲
がいいんだろう。ヤツは他人を家にあげたくないタイプだから。
それに、鍵を何処かに置き忘れたりあんな寒い中忠犬の如く待つて
たみたいだし・・・うん、変な人だ。

あまり考えたくないが、彼はどうやら少なからず自分に好意を持つ
ている、と思われる。・・・自意識過剰かな、やっぱり。

とはいへ、このように明らかなモテ男くんが自分を好きになるよう
な理由は思い付かない。

・・・自意識過剰だつたんだ。うん。

一日惚れだつた。

小鳥と目があつたあの時から、俺は彼女のことが忘れられなかつた。

こんな感情は初めてだつたのだが、ベタな恋物語のよつな気持ちの整理ができず混乱に陥ることはなかつた。

ただ、初めての感覚に、彼女と話すだけで有頂天になる自分に言いようもない喜びを感じた。

俺は何も欠落などしていないのだ、と思えた。

楠木啓介は俺の唯一の”悪友”だ。それなりに遊び歩き、ときには学校の無断欠席にも付き合つた。

この男との出会いのきっかけは少女漫画のよつに同じ本に同じタイミングで手を伸ばしたことだった。

お互ひ、特に表情を変えることはなかつたし譲りうつする素振りもなかつた。

これでは埒が空かないと行動を起こしたのはしばらく時間が経ち、周りからの視線が気になる程度に多くなってきたときだ。

理由を聞けば知り合いが欲しがっていた、とのこと。今思えばその知り合いというのは小鳥のことだったのかもしれない。この男が只の知り合いのためにわざわざヤツにとつては眠くなる本ばかり置いてある古本屋にまで訪れ買うことなどはしないだろう。

このときは相手に譲るという考えがなさそうだったから譲ることにした。

だが、このようなことが2度、3度と繰り返されあいつはいつも譲るという素振りもなく田つきの悪い無表情でこちらを見るのだった。さすがに今回は譲る気はない、と言えばしばらくこちらを睨み舌打ちをしてから黙つて去つていった。

奴はどうやら秀才もいるが馬鹿もいる隣の高校に通つてゐるらしく、度々顔を合わせるようになつた。意識すればすぐに田がいく男だったということもあるのだろう。

その微妙な距離が縮まつたのは奴が俺に面白い本を教える、とふてぶてしく問い合わせてきたことだった。

この男のお陰で単調な日々に少しばかり変化が起つたそして小鳥と

出会わせてくれた。一応感謝をしておく。

楠木の幼馴染みである小鳥は、常に冷静な人だつた。肩下あたりまで伸びてゐる絹のように柔らかい黒に近い焦げ茶の髪、少し明るめの茶の瞳。

感情豊かではないが無感情といつわけでもなく、ひつそりと咲く野花のように可愛らしく笑つ。その笑顔がどうしようもなく好きだつた。

笑顔だけでなく、困つた顔も苛立つた顔も小鳥のならどんな表情でも愛おしく思う。

苛立ちながらも俺やあの七海といつぶざけた女を受け入れてしまつところも、生暖かい笑みを浮かべてしまつ。

気に入らない点があるとすれば、楠木の幼馴染みであるといつことだろうか。楠木の幼馴染みでなければ出合つこともなかつたのだが、俺の知らない小鳥を奴は山ほど知つている。そう考えるだけで醜く嫉妬をしてしまう。

この点は、ベタな恋物語と同じなのかもしれない。

小鳥に関しては理性が効かないことが多々とある。彼女にとつてはいいことではないのだろうが、俺にはこのこともまた新たな自分を見つけたと楽しいと感じてしまつ。

いつか、彼女の一番になれる日が来るのだろうか。

そのためにはまず啓介と同じラインに立たなければならないだろう。それはひどく難しいような気がするし追い付けるのかひどく不安にもなる。だが、これさえも俺は楽しいと感じる。

俺は、今まで最も幸せであり楽しい日々を過いでいる。

佐藤怜という人。（後書き）

こんな感じの怜さんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7771r/>

。隣人クライシス。

2011年11月19日22時56分発行